
孤独に負けてたまるか！

上原直也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独に負けてたまるか！

【ZPDF】

Z3301G

【作者名】

上原直也

【あらすじ】

仲良しの彼女に恋人ができてしまったわたしは毎日をひとり寂しく過ごしている。金曜日の夜、何の予定もないわたしは、ふと昔好きだったひとのことを思い出して。二十代半ばの女性の、何気ない日常の瞬間を切り取った小説です。

せっかくの金曜日の夜だとこいつの、何も予定がなかつた。会社
帰りの道をひとりでトボトボと歩いていく。

最近誰もわたしの相手をしてくれない。最後の皆だつた彩子にまで
フラれてしまつた。彼女に恋人ができたのだ。・・・彩子だけは仲間
だと思ってたのに。裏切りもの！・・・とはさすがに思わないけど、
でも、やっぱりちょっと寂かつたりする。ひとりだけ取り残されて
しまつたような感じがして。

まあ、でも、やつと彼女も幸せになれたんだものね、友人として祝
福してあげなくちゃいけないか、と、自分自身に言い聞かせるよう
に思う。

寒い。十月も下旬に入つて急に肌寒くなつてきた。特に夜は冷える。
夜の色素を含んだ冷たい風が、衣服をすり抜けて心まで吹き込んで
くるような気がする。

街の光は明るくて、暖かくて、賑やかで、そのキラキラとした街の
光はわたしの心をチクチクと刺す。こんなとき、誰が側にいてくれ
るひとがいたら、今のこの寒さも、きっと逆に心地よく感じられる
のだろうけど。

もしかすると、わたしはこのままずっとひとりなのかもれないな
あ、とポツンと思う。そう思うと、どうしようもなく寂しくなつた。
極端な孤独感は水が冷えて固まるときのように膨張してわたしの心
を傷つけていく。恋人がないくらいで大げさだけど。でも、そん
な感情はどうすることもできなかつた。

このまままっすぐ帰る気にはなれなかつたので、田についたセルフサービスのカフェに入った。金曜の夜のせいか店は混雑していて、賑やかな話し声が店内に溢れていた。カップルや友達連れのひとたちばかりで、わたしだけがひとりきりでいるような感じがした。

店を出ると、家に向かつて歩き出した。ふと何気なく夜空に視線を向けると、三日月が明るく輝いていた。少し目に冷たいような感じのする、透き通つた優しい光だつた。その光を見ているうちに、わたくしは唐突に昔好きだつたひとのことを思い出した。もうそのひとのことは忘れたと思つていたのに、それとは違う感情が、まだ、わたくしの心のなかには残つていたみたいだつた。

家に帰つてから料理をする気にはとてもなれなかつたので、アパートの近くにあるコンビニで弁当を買つた。それと飲み物とデザートを少し。

一人暮らしだから、玄関を開けてももちろん誰もいない。孤独が、息をひそめてわたしこと待ち構えている。音がないとなんだか心細いので、とりあえずという感じでテレビをつけ、そのテレビをつけっぱなしにしたままお風呂にはいる。そしてそのあとに遅い夕食をとる。食べた弁当は、いかにも身体に悪そうな味がした。

つけっぱなしのテレビではだいぶ前に話題になつた映画が流れていった。そしてそれは、昔付き合つていた彼とはじめて観にいつた映画でもあつた。

思い出すつむりなんて全くなかつたのに、わたしは彼と一緒に過ごしたたくさんの時間をしてしまつた。記憶が、わたしの心を無理やり通り抜けて行くような感覚があつた。すぐにチャンネルを

変えればいいのに、でも、なぜかわたしはやつある」とができた。いた。

別れたのは、彼の浮気が原因だった。彼が以前付き合っていた恋人と隠れて会っていたのだ。彼はただ相談に乗つていただけだと言つたけれど、わたしは彼のその言葉を信じることができなかつた。

彼は何度もわたしに謝つてきてくれたけれど、そのときわたしはちょっと意地になつていて、彼のことを許してあげることができなかつた。

でも、と、思う。もしかしたら、彼はほんとうにただ相談に乗つてあげていただけなのかもしない、と。あるいはあのとき、わたしが彼のことを許してあげていたら、と。だけど、今更そんなことを思つてみてもはじまらないのだけだ。

と、唐突にケー タイの着信音が鳴つた。見てみると、それは彩子からのメールだつた。

わたしがひとりで落ち込んでるんじゃないかと心配に思つてメールしてきてくれたみたいだつた。彩子からのメールを読んでいるうちに、ふと思わず笑みがこぼれた。彼女の気遣いは単純に嬉しかつた。わたしは彩子に向かつて、余計な心配はしなくていいからとやせ我慢のメールを送信すると、ケー タイを閉じて、立ち上がつた。

そういえば、やつもコンビニで買つてきたテザートがまだ残つていたことを思い出した。早速、冷蔵庫からテザートを取り出そと、スプーンで掬つて、一口口に含んだ。

甘くて優しい味が口のなかに穏やかに広がつていつた。甘いものさ

えあれば、独り身の切なさなんてなんでもないや、と呟つた。
孤独に負けてたまるか!-とわたしは思つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3301g/>

孤独に負けてたまるか！

2010年10月10日13時29分発行